

「私自身の読者にのみ語り得る」物語

——有島武郎「酒狂」論——

石井花奈

はじめに——同時代評・先行研究・問題の所在

有島武郎個人雑誌『泉』（叢文閣）は一九二二「大正一一」年一〇月一日に創刊され、翌年八月一日の終刊号（一九二三「大正一二」年八月）——有島武郎が新聞記者波多野秋子との情死（一九二三「大正一二」年六月九日）を遂げてからおよそ二ヶ月後に、叢文閣の設立者足助素一によって手掛けられた追悼号——をもってその幕を閉じた。全一〇冊（第一巻第一号〜第三号、第二巻第一号〜第六号、終刊号）で、『泉』に掲載された小説は、「酒狂」（『泉』第二巻第一号／一九二三「大正一二」年一月）、「或る施療患者」（第二巻第二号／同年二月）、「骨」（第二巻第四号／同年四月）、「親子」（第二巻第五号／同年五月）、「独断者の会話」（第二巻第六号／同年六月）の五編である。

『泉』は創刊号から一万部以上の売れ行きだったにもかかわらず、掲載小説のいずれも同時代評がほとんど見受けられないだけでなく、有島研究史においても、晩年小説群の重要性が指摘され

ながらも研究が滞っているというのが現状である。たとえば「酒狂」は、『星座』（一九二一「大正一〇」年七月）中断以来の創作（ただし童話は除く）だが、この点について野坂幸弘は「創作力の減退が著しかった大正九、十年頃にくらべると、「泉」の時期の有島は多作であり、そこには、思想、創作のうへのあらたな試みが模索的になされている」と指摘し、その重要性を語っている。また、詳細なモデル考証を行った高山亮二は「この彼の晩年の——思想的には「宣言一つ」以降の——一時期に書かれた作品群は、その出来、不出来はどうであれ、その時点の有島の思想・芸術を示すものとして重要な意味をもつといえよう」と述べたうえで、晩年の作品群についての研究の少なさを指摘し、「更に考究されている問題」であるとしている。これ以降、内田満⁴、中村三春⁵によって「酒狂」を中心とした晩年作品群の研究が行われたが、高山の指摘した研究の少なさは未だに解消されていない。

こういった現象は、発表媒体である『泉』の特殊性に起因するものと考えられる。「私自身の読者にのみ語り得るといふ意識」（『泉』広告文／『時事新報』一九二二「大正一一」年九月）の

もと創刊された『泉』は多くの問題をはらんでおり、先走って述べれば、個人雑誌という出版形式が同時代において極めて特殊なものであったこと、有島の言説のみで構成されていること、購入する読者が限定されること、そして『泉』掲載小説の受容にある種の枠組みが与えられること等が考えられるからである。

同時代評の少なさの原因の一端としては、有島の言説のみでの構成と読者の限定という二つの要素が考えられるが、有島研究の滞りの原因は一体どこにあるのだろうか。そのように考えたとき、『泉』創刊前後の有島自身のスキャンダラスな事件——「宣言一つ」（一九二二「大正一一」年一月）をめぐる論争、私有財産放棄・農場解放（同年七月）に代表される生活改造、波多野秋子との情死（一九二三「大正一二」年六月九日）——を想起せずにはいられない。『泉』掲載小説に関する論考は、有島の情死に至るまでの思想として収斂するものがほとんどだからである。

とはいうものの、ここで指摘しなければならぬのは、有島自身の事件によって解釈の方向性が狭められているということ以上に、個人雑誌という発表媒体それ自体が「作者有島武郎」とテキストとを結びつける装置であるということだ。したがって、晩年の小説群の研究を進めるためには、まず発表媒体の特質を明らかにすることから始めなければならぬ。

本稿で扱う「酒狂」は、この装置の効力が最も顕著に表れるテキストの一つであると考えられる。というのは、登場人物「B」に語り手「私」が「武郎」と名指されるからである。この点について内田は「有島の小説中、その分身が作者の実名で呼びつけられるのはこの作品だけである」と指摘したうえで、「酒狂」を「私

小説」として位置付けている。また、野坂が「思想、創作のうえでの新たな試みがなされている」と指摘したのも、「私」が「武郎」と名指されることによるだろう。

このような特徴をもつ「酒狂」は、前述したように作者と密接に結び付けられて論じられる傾向が強かった。語り手「有島という前提のもと、Bが放つ強烈なニヒリズムやアナキズムに対する「私」——つまり有島の「相違、断絶」の「自覚」（野坂）、あるいは「同化願望」（内田）を見出し、それを有島が死に至るまでの思想の道程として捉える、というものである。

以上のような流れのなかで、中村は、「『私小説』への逸脱」を看取する内田の読み方を「極めて『妥当』な読み方」であるとしつつも、「あるテキストが『身辺小説』や『私小説』のジャンルに属するものとして認知される理由は、そのテキスト自体の特性というよりは、むしろそこに作家の「身辺」や「私」に属する、あるいはそれらしき事実と同一の内容を見出そうとする読者側の操作にある」としてそれまでの研究史を一蹴し、「テキスト様式論」という立場からの読解を試みている。

あるテキストが「私小説」の類として認知されるのは「読者側の操作」によるものだという中村の主張はもつとのだが、「酒狂」にはむしろ、テキストに書き込まれた事柄をどこまでも「作者有島武郎」と結び付けて読ませようとする、言ってみれば、作者側の「操作」があるように思われてならない。

先に指摘したとおり、「酒狂」の語り手である「私」はBに「武郎」と名指される。登場人物にわざわざ「武郎」と呼ばせなくとも、『泉』という個人雑誌に掲載された作品であること、そして

「私」の人物造形とを鑑みれば、『泉』の読者は彼を作者として読むであろう。それにもかかわらず、あえて「私」を「武郎」と呼ばせること——これは「酒狂」というテクストの核ともいべき特性であり、それによって「私」は、作者有島武郎¹以外の何者でもなくなるのである。

この作者側の「操作」の内実には迫るべく、次章では、まず『泉』という発表媒体について考察を進めていく。

1 作者と読者との直接的回路

『泉』が「私自身の読者」にのみ語り得るといふ意識のもと創刊された特殊な発表媒体であることは、高山も指摘しているが、この効果は我々が思っている以上に強いものであった。

たとえば「酒狂」唯一の同時代評である今野賢三の「有島武郎の『酒狂』（『種蒔く人』一九二二〔大正一一〕年二月）には、『最近の日本文壇にとつて最も記念すべき収穫の一つであることを私は広言しては、からない』とあり、この今野の感想に対し高山は「少し誇張された感想とも云えるが、当時の有島ファンの、また『泉』読者の声を代表するものの一つと、みるべきであろう」と指摘している。

続いて一般読者の感想を確認したい。引用するのは、『泉』終刊号に掲載された「故人の死を悼みて足助氏に宛てたる書（七月十八日迄に着的分）」の中のひとつで、太田枝一氏のものである。有島の死が報じられてから、多くの一般読者が足助素一に手紙を送った。先述したように足助は『泉』の出版社叢文閣の設立者で

あり、有島とは無二の親友ともいわれた人物である。その彼の意向によって、『泉』追悼号は実現した。送られてきた手紙のなかには、一般読者に限らず、武者小路実篤、柳宗悦ら白樺派同人、山川均、河上肇、そして同時代評の今野賢三の便りも散見される。

晴天の霹靂！ そんなこと以上の驚きは全く此のことなのです。／有島様は死んだ？ そして、あゝ、戦つても免れぬ運命、心から喜んで死ぬ。さうした有島様と同世紀に生れ合はした私も何かの因縁でせう。『独断者の会話』は私達への置土産だつたんですね。有島様からは時折おたよりを戴いて居りました。／『泉』半年分前金は有島様へ香をたいて下さい。

この一般読者からの便りに、今野の感想以上の「ファン」の熱狂的な思いが率直に書き込まれていることは明らかである。ここでは「独断者の会話」についての感想が記されているが、その他の作品についても「私達への置土産」と感じた「ファン」が少なからずいたであろうことは想像に難くない。

ところで、有島という「私自身の読者」とは具体的にどのような読者を想定していたのであろうか。それを検証するにあたって、まず個人雑誌の構想がいかなる目論見だったのかを確認したい。

有島が個人雑誌の構想について言及している資料はいくつかあるが、たとえば一九二二〔大正一一〕年一月一日発行の『新潮』に「子が今年の計画」という総題のもとに掲載された「満韓旅行と個人雑誌」には、「個人雑誌を出したいと思つてゐます。それ

は、毎月色々な物を書かせられます。頼まれるとお断りすることが出来ず、どうしても中途半端なものを出すことになるので、それをふせぎたいために出さうと思つたのです。その雑誌が出れば、書く方でもそればかり力を注ぐことが出来ますし、また読者の方でも、あちこちの雑誌を見なくとも私のものはその雑誌一つ見ればいゝからです」とある。そのほかの資料においても、原稿を頼まれると断ることができない、個人雑誌を出すことができれば創作に集中することができるとし、読者にとつても便利である、といったことが繰り返されている。

しかし、「私自身の読者」のみ語り得るといふ意識」が、「あちこちの雑誌を見なくとも私のものはその雑誌一つ見ればいゝ」という利便性のみからきているとは考えにくい。ここで特筆したいのは、『泉』創刊のおよそ一ヶ月前に刊行された有島武郎著作集第一五輯「芸術と生活」(一九二二「大正一一」年九月／叢文閣)の跋文である。執筆依頼からくる気疎さとは別の、新聞雑誌それ自体に対する気疎さが吐露されている。

それからこの年に於て、私は自分の実生活に多少の変化を行つた。その目論見が或る人の口から漏れたために、世の中の或る方面に兎や角の噂さを提供する結果になつた。(略)既に世の中に広がつて、而かも新聞や雑誌が多少なり間違つた報道をしたり、私の考へに対する多少見当りがひな揣摩臆測が發表されてゐる以上は、何かの機会に私の考へ方や実行の方法を、少くとも私の読者だけには報告しておくのが至当ではないかと思つてもゐる。

すなわち有島が構想した個人雑誌は、執筆依頼を断り創作に専念するためのものということ以上に、「チヨーナリズム」によつてつくりだされる「噂さ」や「揣摩臆測」、誤報を断ち切り、個人雑誌を手取る「私の読者」だけに作者の「考へ方や実行の方法」を直接「報告」するためのものであつたといえる。これが「私自身の読者」のみ語り得るといふ意識」の内実である。

2 〈有島信者〉を生産する装置

したがつて有島のいう「私自身の読者」とは、有島の個人雑誌を手に取り、「噂さ」や「揣摩臆測」に惑わされずそこに記された直接的な「報告」を信ずる読者ということになるが、これはあくまで有島が想定する読者像であり、先に示した「ファン」の実はいまだ不明瞭である。それを相対的に考えるため、田中純「有島武郎の甘さ」(『作家の横顔』一九五五「昭和三〇」年七月／朝日新聞社)を引用し、第三者から見た有島の読者像を確認する。

(有島の情死によつて——引用者註) 僕たちの感じたシヨックや傷心は、あの時、一般の世間の人たち、とくに有島信者とさへ呼ばれた武郎氏の愛読者、崇拜者の群が感じたであろうシヨックや失望や幻滅の感じとは、だいぶ性質の違つたものであつた。(略)それらの読者の半数以上は教育のある婦人であつたと言われるし、残りの半数の大部分は、一般の文学青年よりむしろキリスト教徒や教育者や医者や、

社会運動に興味を持つ人たちであったという点から見ても、その人気の性質が想像される（傍点は引用者）。

この資料によつて、有島の読者層の「半数以上」が「教育のある婦人であった」こと、その他「キリスト教徒や教育者や医者」あるいは「社会運動に興味を持つ人たち」であったことが確認できるが、注意したいのは、彼らが「有島信者とさえ呼ばれた」「愛読者」であったということである。先に引用した一般読者の便りに「『泉』半年分前金は有島様へ香をたいて下さい」とあったのを思い出して欲しい。

『泉』創刊号に足助による「編集余録」が掲載されているのだが、そこには地方の大取次店での『泉』の販売を交渉した際、「七・四掛以上では相談になら」ないとされ、「僕は相当品位ある雑誌の正味を参照して「泉」の正味を正當に計上した」と読者に断つたうえで、地方の大取次店での販売を願ひ下げた旨が記されている。そして、以下の文章が「一般読者諸君」と小見出しを打つて続けられている。

岩内には既に白水会といふ「泉」の購読者会が出来たそうです。その地方々々で有島の愛読者が、三部なり五部なりまとめて申込んで下されば著者は何より愉快に思ふでせう。但し何百部まとめて下さつても雑誌組合員以外に割引出来ないことは申すまでもありません。只六ヶ月前金御払込に對して些少引けることは別掲の通りです。

「白水会」というのは、「生れ出づる悩み」（一九一八「大正七年九月」）のモデルとなった画家木田金次郎を中心に結成された「購読者会」である。地方での販売が出来なくなった『泉』は、「白水会」のような「購読者会」の大部分の購入によつて、地方への頒布を可能にしていたのであろう。

大部分の購入に限らず、『泉』の刊行を支える読者を、本稿では田中の言葉借りて「有島信者」と呼ぶことにする。

以上の検証によつて、有島が想定する「私自身の読者」の内実と「ファン」の実体とが明瞭化されたわけだが、結論からいえば、両者の間にはズレがある。田中が、有島の周囲に「アナキストたち」が集まり出した頃を回想するなかで以下のように述べていることは看過できない。

当時のアナキストたちが、相当意地悪く武郎氏を扱つたらしいことを想像することが出来た。「略」武郎氏の死後、武郎氏の小切手帳から発見された使途不明の出費が相当大きな額に上つていたと聞いたが、それが何処に消えたにしても、当時の有島氏の身辺のわずらわしさを想像することは出来る。／＼しかし、当時の一般の有島氏の読者たちは、有島氏の思想と環境と性格とにからまる深刻な葛藤を知らなかつた。「略」有島氏の文章には、どんなに深い苦悶を表白している時でも、いつでもその表面に甘いオブラートがかけられており、多数の読者はそのオブラートだけでたんのうしたからである。

これは、有島と「アナキストたち」とがいわゆるリヤク——略奪の意で、「リヤク」というのは俗称。半ば強制的な資金カンパのこと——の關係にあつたことを示す記述であり、「酒狂」に描かれた一夜も、金銭的なやりとりは捨象されているが、Bはリヤクしに「私」のもとを訪れていると考えていいだろう。Bが「アナキスト」、テクストの言葉でいえば「無政府主義者」であることについては次章で詳述する。

先の引用ののち、田中はこの有島の「甘さ」について、「他人に対して批判の甘い有島氏も、自己に対しては決して怠惰な批評家ではなかった」として、生活改造に努めた有島を回想し、彼の「深刻な葛藤」や「深い苦悶」とは相反する〈有島信者〉の反応を以下のように続ける。

北海道の農場を開放したというだけでも、慈善家、人道家、人格者の名声が高まり、見当違いに氏を崇拜する人々の群れがいよいよ多くなつて来たからである。／むろん武郎氏は、こうした世間の崇拜や期待に対して、自分を自由にしようとして、一生懸命にもがいている。「略」（『泉』第一巻第一号）「泉」を創刊するにあつて」の一節を引用して——引用者註）ここで彼は絶対自由のアナキズムの宣言をしたつもりなのであるが、読者はそうは受けとつていない。彼の人格や徳性に絶対信頼を置いている読者や世間の人たちは、彼が過激らしい言葉を発すれば発するほど、ただわけもなく感激して、拍手を送るという風であつたから。

つまり、新聞雑誌という作者と読者との媒介を自ら手掛けることによつて「噂さ」や「揣摩臆測」の根源を断ち、それと同時に不特定多数の読者を〈有島信者〉に限定することで、作者からの「報告」を直接的に伝達するはずだつた「泉」は、有島の意図とは裏腹に〈有島信者〉の「見当違い」な「崇拜」を助長するものでもあつたのだ。

〈有島信者〉が田中のいうような妄信的なタイプだけではなかつたにしろ、「私自身の読者」にのみ語り得るといふ意識のものとも有島の言説のみで構成された「泉」は、テクストに書き込まれた事柄を、作者有島武郎と結び付けて読むことだけに没頭する〈有島信者〉を生産する装置であり、その癒着性は「泉」を媒介とした発信受信の回路のなかで生成され続ける。

さらに、その癒着性は中村が指摘したように研究者にまで及んでいる。だからこそ中村は「作者有島武郎」を切断し、「テクスト様式論」という立場での読解を試みたのだろうが、先に指摘したとおり、「酒狂」というテクストの核ともいえる特性は「私」が「武郎」と名指されることであり、このことに触れずに「酒狂」を論じることは、「酒狂」に書き込まれた主題——〈有島信者〉に向けられた作者からの「報告」——を読み落とすことに繋がりがねない。

とはいうものの、「酒狂」を「私小説」として読むべきだといふつもりは毛頭ない。むしろ行われるべき考察は、「酒狂」の発表媒体が〈有島信者〉を生産し、テクストと作者との癒着性を生成する装置であることを前提に、「武郎」という固有名詞がいかなる効果をもたらしているかを明らかにすることである。

したがって次章では、人物造形を整理することで、作中で名指される「武郎」を、テキストの読解を通じて初めて立ち現われてくる記号としての「有島武郎」とし、テキストと「作者有島武郎」の癒着性を取り扱う作業を試みる。

3 記号によって浮かび上がる構造

「酒狂」は、「私」が「寢床」から出なければならぬような深夜に、酒に酔ったBが訪ねて来る場面から始まる。物語は、「私」の「書齋」でのBとの会話を中心となるのだが、二人の会話はどこまでも相容れぬもので、それゆえ物語全体に奇妙な雰囲気醸し出す。「私」はいつのまにかBの言葉を自分自身に対する言葉として受け止め、打ちのめされていく。そのような「私」の性質をまとめると以下ようになる。

Bに「武郎」と名指され、「芸術家」ともいわれる「私」は、「母」と「二人の子供」に加え、「女中」、「玄閨番の書生」と共に暮らしており、その「生活」が「無理強ひにゆすぶられるほど不愉快なもの」ないと語る。性格は「理不尽」がつくほどの「潔癖」症で、それが反映されたかのように「台所」は「寒々」しいほど「きれいに片付いて」いる。物語の舞台ともいえる「書齋」は、「芸術家」である「私」が日々仕事に打ち込む空間であり、そこで物語が展開されることによって「私」が「芸術家」であることは終始強調されている。

このようにまとめると、仮に「私」が「武郎」と名指されなくとも、「有島信者」は「私」を「作者有島武郎」として読む

であろうことは想像に難くない。そして『泉』が生成する癒着性によってそれはより強固なものとなるが、「酒狂」の場合は、前号までの『泉』の目次からみてもそれがいかに強固なものとなり得ていたかが推察される。

「宣言一つ」をめぐる論争における最後の有島の反論「「静思」を読んで倉田氏に——同時に自分の立場を明らかにするために——」は、二度に分けて『泉』第一巻第二号と第三号とに掲載された⁷⁾。紙幅に限りがあるため、ここで「宣言一つ」をめぐる論争を詳細に辿ることは控えるが、「有島信者」ならば「宣言一つ」をめぐる論争の行方に注目していただろうし、最後の反論を他ならぬ『泉』に発表したとなれば、それは倉田百三に向けられた反論であると同時に、副題どおり「自分の立場を明らかにするために」(「有島信者」)に向けられたものとして受け取ったであろう。その翌月に発行されたのが、「酒狂」掲載号であった。

前述した通り本稿では「武郎」と名指される「私」を実体ある「作者有島武郎」ではなく、「有島武郎」という記号として捉える。そのように捉えたときその記号が意味するのは、高山が指摘するように「宣言一つ」以降の思想を有した「有島武郎」ということになるだろう。

「武郎」と名指される「私」が「有島武郎」であるように、本作にはもう一人固有名詞で名指される人物がいる。それが「山川」である。

「俺ら今日山川のところさ行つた。お前は労働問題を論ずるさうだが、お前にその資格があるか。お前は労働者か。だ

ら今日は何を働いて、いくら儲けたといつてくれた。山川は俺らこと無政府主義者だと云つた。俺ら何も解らねえ。社会主義だか無政府主義だか、俺ら何も解らねえ。俺ら今日も昨日も何んもしねえで、電車切符が一枚あるだけださ。山川より俺ら方が余つぽど猜いべなあ。」

引用はBの台詞であるが、Bが唐突に「山川」とのやりとりを「私」に話しているところをみると、「私」も「山川」という人物を知っているということになる。「山川」とは、社会運動家の山川均であろう。山川は『泉』の出版社である叢文閣からいくつかの著作を発刊しており、足助との接点があったことに加え、前章にて指摘したとおり、『泉』終刊号「故人の死を悼みて足助氏に宛てたる書（七月十八日迄に着の分）」のなかに山川からの便りがあったからである。ただし、それを参照する限り、山川は有島との直接的な交渉は持たなかったようだ。

いずれにしても、同時代における山川の活動は、『前衛』（一九二二「大正一一」年七・八月合併号）に「無産階級運動の方向転換」——通称「山川イズム」——を発表する等、势力的なものであったし、「日本社会主義同盟」（一九二〇「大正九」年九月）が結成から一年にも満たないうちに解散となり、一度は統合された社会主義の諸潮流がマルクス主義と無政府主義とに再び分化したのもこの時期であった。以上のように考えれば、Bを「無政府主義者」だという「山川」は、山川均と捉えるのが妥当であろう。

続いてBの人物造形を確認する。「女中」が「おびえ」るほどの強烈さをもって物語に登場するBは、「疎らに生え延びた粗剛

な頬髯」、「半分開きか、つた袋の口のやうなだらしない厚い唇」、「白皙な逞しい胸や腕」、「熟柿臭い酒気と共に噴き出されるらしい油ぎつた肉の匂ひ」等、容姿の執拗な描写によってその強烈さが強調されている。家族は妻と娘の秀子、そして妻の腹にいる第二子を含めた四人家族。ある事件で「黒表中の人間」と見なされた結果、職を失い、妻子をも失った人物で、先に指摘したとおり、「山川」に「無政府主義者」と言われている。

ここで、Bが「黒表中の人間」と見なされた事件について注釈を加えておきたい。Bのモデル人物が田所篤三郎であり、彼が「創健社」という貸本屋を営んでいたことは高山によって既に指摘されているが、この事件については貸本屋研究の藤島隆「貸本屋独立社とその継承者たち」（『学園論集』第一三三号／二〇〇七「平成一九」年九月／北海道学園大学研究会）の方が詳しく、事件のモデルとなった「創健社事件」の新聞記事が紹介されている。

その記事は一九二二「大正一一」年九月二三日発行の『北海タイムス』掲載の「札幌古本屋創健社は社会主義者の巢窟 表戸を鎖し革命歌を高唱したのを捕はる」という見出しのもので、次に引用するのはその全文である。

札幌市大通り西五丁目古本屋創健社事田所篤三郎（三〇〇）

は主として思想に関する貸本をなし東京方面の主義者と気脈を通じ居る模様なりしが実は社会主義を標榜する不良青年の巢窟にて女学生に対し手紙等を送り盛んに風紀を紊し居る風評あるより札幌署にて内偵中二十日夜左記の者集合して表戸を閉し革命歌を高唱し居るより薦田署長は同署高等係日野警

部補以下と共に現場に到り何れも札幌署に引致すると共に印刷せる不穩文書等を押収し引揚たるが同署にては秘密出版法違反として目下拘留取調中

右の資料によつて、Bの「強烈」さや物語全体を覆う奇妙な雰囲気、「思想に関する貸本をな」すその店が「社会主義者の巢窟」と化していたこと、それによつて特別高等警察に「黒表中の人間」と見なされていたことによるものであることがはつきりする。

創健社事件が報じられたのが、一九二二「大正一一」年九月二三日、「酒狂」発表が翌年一月であることを考えると、作中でこの事件の詳細が慎重に伏せられていることにも合点がいく。「酒狂」という物語の根底には、事実をそのまま語ることができないような世界観ともいへべきものがあり、それがBの「営業停止」のエピソードや、「山川均」を思わせる「山川」に「無政府主義者」と呼ばれるBという形で表現されているのである。

したがって「酒狂」は、記号やBの人物造形によつて「社会主義」あるいは「無政府主義」といった思想に縁取られた物語ということになるわけだが、これはつまり、固有名詞を記号として捉え直しても、物語は「宣言一つ」以降の思想を有した「有島武郎」／「社会主義運動家」山川均／「その「山川」に「無政府主義者」と呼ばれるBという三本の支柱によつて、それ以外の読み方を許さない構造になっているということになる。これこそが作者側の「操作」なのである。だとすれば、作者の分身としての「武郎」は、〈有島信者〉に向けていかなる「報告」を発信しているのだ

ろうか。それを検討すべく、次章では語りに着目して考察する。

4 Bを語るための〈卜書き〉

「私」の語りを考察するにあたって特筆すべきは、Bの台詞に戯曲の卜書きとでもいへべき括弧書きが挿入されているということである。

「酒飲まねえお前は偉いよ（淫らなほどの哄笑）。俺らは酒飲んだもなあ……飲まねえであるところさ（胸をさしながら）何んだか詰つて、詰つて、苦しくなるでや……物がいへねえもの。だからお前は酒が物いふだといふべさ。」（傍線は引用者、以下同様）

このほか、「大きな声」、「（Bははたげて油ぎつた胸のあたりを平手で無性に撫で廻はした）」、「段々狂暴に」、「（Bは皮肉に声高く笑つた）」等の括弧書きがBの台詞に挿入されており、これを本稿では〈卜書き〉と呼ぶことにする。物語の冒頭での「私」は「酔つたら悪いか。悪けりやなぐつてくれ。殺してくれ。その殺してくれを馬鹿にしたやうな軽い調子で云ひながら、私に詰め寄せて来る」というように、Bの発話を自らの言葉に置き換えた間接話法で描写していたのだが、Bが段々と饒舌になり行動が激化していくにつれて間接話法は用いられなくなり、その代りに先に示した〈卜書き〉が頻出するようになる。

これは、物語全体を掌握するはずの語り手「私」の権能から、

Bの言動や行動がはみ出し制御不能になった状態を示している。たとえば、Bの台詞に多用される三点リーダーは、彼のうめきやどもり、あるいは沈黙等を読み手に想像させるものであり、そのようなBの様子を「私」が自分の言葉で描写できなくなっていることの証左として考えることができる。つまり〈ト書き〉は、三点リーダーの使用だけでは描写し切れないBの「強烈さ」に臨場感をもたせるものとして機能しているのである。

したがって、〈ト書き〉はBを制御し語るための「私」の方法として捉えることができるが、〈ト書き〉の挿入によって一人称小説が破綻をきたしているともいえる。だがここで問題化すべきは、その危険を冒してでも「私」はBを語る必要があったということである。結論を先取りすれば、作者がその分身としての「武郎」を登場させた最大の目的は、「武郎」の内面を、Bの言葉を利用して掘り下げることなのである。

そのように考えた場合、「私」が語る激しい感情の起伏とBを語るための〈ト書き〉との間にはかなりの温度差があるように思われる。言うまでもなく、「私」の感情は主観的なものであり、〈ト書き〉は客観的なものだからだ。しかし、このような状態によく似た語り——「私」の主観と客観とが入り混じった語り——が展開される場面を見逃してはならない。

私は怒りを以つて立ち上つた。しかも私は何をした。一人残らず寝しづまつた女中部屋の前を忍び足で、廊下伝ひに台所に出かけて行つたではないか。腹の中では私はぶり／＼と腹を立ててゐるのだ。

これは「私」がBの夜食を用意するために台所へと向かう場面である。「しかも私は何をした」、「忍び足」をしてまで「台所に出かけて行つたではないか」というこの語りには自分自身の「お人好し」に対する苛立ちを客観的に語る「私」が窺え、いわば行動主体の「私」とそれを眺める「私」との乖離が起こっている。つまりこの物語の語り手である「私」は、行動と意識との乖離という性質をもった人物であり、激しい感情の起伏を語る「私」は行動主体としての「私」、〈ト書き〉を挿入する「私」は眺める「私」として捉えることができるのである。

「私」とBとの関係について中村は、Bを「言語コミュニケーションの不能な対象」として「身体それ自体が言語と癒着した（Heiligt）形において、意味の不明なメッセージと化して」といふとし、「Bを強く異物視しつつも、Bへの関心を断ち切れない」ところに、この「酒狂」という物語の、物語としての自己差異化は立脚している。「この意味論的な自己差異化の運動こそ、この物語が読むことの誘惑となるための根源的な装置であり、ここに起動する誘惑の〈行為〉（action）は、いわば〈侵入者〉のミュートス」であると考察する。そしてその「〈侵入者〉のミュートスは、物理的に生活を乱す以上に、そもそも自己という信念そのものを脅かし、その幻想性を暴き出す形而上的な意味を持っている」ため、「Bは最初から最後まで〈客〉として処遇されていないがらも、「私」の理性による根本的な理解は決して及ばず、さりとて「私」がそれによって駆逐されて浄化を迎えることもない、いわば絶対的な緊張状態」、アルベール・カミュの言う「〈不条理〉

(「absurde」)の拮抗」が作り出されているとして、有島とカミュとの共通性を指摘している。

たしかに「私」の「理性による根本的な理解は決して」Bには到達しない。しかし「浄化」とは言えないまでも、夜のうちに帰ってしまったBの「身の上を考へ」た物語終盤の「私」は、ある境地に到達している。

そもそも、Bは「意味の不明なメッセージ」ではない。Bは酒を飲まない「物がいへ」ないからこそ、あえて酔った状態で「私」を訪ねているのだ。「黒表中の人間」と見なされ、活動の中心であった貸本屋の営業を停止させられたBは、生きることも死ぬことも選ぶことができずに身動きが取れなくなり、リヤクの関係にあった「私」を訪ね、「切れぐ」の言葉を重ねることですの葛藤を話している。

Bが冒頭で「私」に「悪けりやなくつてくれ。殺してくれ」と言っていたことを思い出して欲しい。それに「私」が取り合おうとしないがために、Bは自らの手で「思い切り自分をなく」り始めるが、それすらも「私」に止められたBは「何でも命じろ」と吐き捨てるように繰り返す。つまりBは、身動きが取れなくなつたからこそ、自分を「命じ」ることもでき、「働き口」を探すこともできる「私」——公の顔をもつ「芸術家」の「私」——を訪ねているのだ。しかし、その一方で「私」はBの言葉をどこまでも自分のものとして受け取り、それに打ちのめされていくかのようにならざるを語らぬ。

夜は死の寂寞にまで深まつてゐた。思ひ出したやうに洩を

す、るBの激しい呼吸の外に聞えるものとしては無かつた。私には咄嗟に云ひ出すべき言葉が不幸にも失はれてゐた。而してその代りに、酒で一時凌ぎの出来る奴はまだ幸福だと嘗て私の云つた言葉を思ひ出して、自己嫌悪を感じてゐた。その言葉は固よりBを酒から遠ざけやうとする方便をも含んでゐたものにせよ、私のしらくしく云へる言葉か……

ここで「私」は「夜」の「深ま」りと「死」とを結び付ける。それは「洩をす、るBの激しい呼吸」が象徴する「死」への恐怖という音によつて支配された「夜」ということだけではなく、Bによつて繰り返された「死」という言葉が、「言葉が不幸にも失はれ」た「私」のなかで内面化されたことをも物語る。これ以降、「私」はBへの理解を執拗に語り出していくのである。

5 「私」の「解る」をめぐる物語

「私」がはじめてBに理解を示すのは、Bが「山川」に「無政府主義者だと云」われたと語る場面からである。

「解るよ」／私は真剣な気持ちになつてゐた。あすこまで落ちるのが本当だ。本当でないまでも当然だ。私も幾度あ、した恐ろしい影を自分の生活の前途に描いたらう。然し私は今日まで踏みとまり、踏みとまり、踏みとまり、踏みとまり、全性から来たのか不徹底さから来てゐるのか、私には疑へた。だから今の言葉は私には異邦の言葉ではない。／「僕等のや

うに過去の生活をうんと背負ひ込んだ人間には、君のはいり込んだ道は解るよ。然し……」

「私」の言う「今の言葉」が具体的にどれを指すのかは特定できないが、自分が何者であるのか、もつといえほどのような「生活」を送る階級に属しているのか、そのようなBの疑念が「私」に「解る」と言わせたものと考えるのが妥当であろう。だからこそ、「私も幾度あ、した恐ろしい影を自分の生活の前途に描いたらう。然し私は今日まで踏みとまり、踏みとまりつて来た。それが私の健全性から来たのか不徹底さから来てゐるのか、私には疑へた」と、自分自身の階級に拘泥していた過去を語るのである。そして、「私」がいまだにそれに拘泥していることは、Bに「お前は芸術家だ」と突き放されたときの「Bの皮肉な高笑ひを聞かされた私は、自分の殉情的な言葉を悔いるよりは、彼れが私を身近かにも寄せつけないのを感じて思はずいらだつてゐた」という反応からも明らかである。

先に引用した場面で、「私」はBに対し「僕等」という言葉である種の仲間意識を語っていた。したがつてこの場面での「私」の「いらだち」は、「僕等」という言葉に表れているように、「私」が思うBとの関係性は階級を超越した特別なものであると信じていたことに起因するものなのである。しかしながら先に指摘したとおり、Bは「私」をリヤクの対象として訪ねているのだから、「解る」と言った「私」を「芸術家」だとして突き放すのは当然の成り行きといえる。この決定的な認識のズレを表出させること

こそ、「酒狂」に作者の分身としての「武郎」を登場させた最大の目的である。つまり作者は、Bの言葉を利用して「武郎」の内面を掘り下げ、作者の「考へ方や実行の方法」を（有島信者）に直接「報告」しているのである。

前章にて、夜のうちに帰ってしまったBの「身の上を考へ」たとき、「私」はある境地に到達していると述べた。その境地とは、わかりあえないことが「解る」という境地である。Bに「生活」を「無理強ひにゆすぶられる」ことによつて快／不快の感情を繰り返していた「私」だったが、Bを寢床へと連れて行つたあと、結局「現在の気持ち」に落ち着いたかのように次に語る。

母の休んである部屋を通り過ぎて、次の部屋にはいると、私のと枕を並べて二人の子供は熟睡してゐた。丹前を脱がうとして、寝衣の醤油のしみを思い出したが、それを着かへるのも物臭かつたし、第一不思議にそれがもう気にならなくなつてゐた。／虫だけが何所かで細々と啼いてゐた。

Bと別れたあとに語られる「私」の家族の様子は、「私」が「執着」してきた「生活」そのものだ。「芸術家」だと突き放されたときに付けてしまった「古血色のしみ」が単なる「醤油のしみ」と語られるのは、自分の階級に拘泥する「私」の意識の象徴として刻印された「しみ」が、「生活」の中に溶け込むことで薄らいでいったからである。また、「死」のイメージに覆われていた「夜」が「虫だけが何所かで細々と啼いてゐた」と語られることから、平穩な「生活」が戻つてきたことを示している。つまり「私」

は、Bに手を差し伸べたり理解を示したりはするものの、結局は自分の「生活」に「執着」し続けているのである。

そのような「私」は、翌朝「Bは寝坊するだらう」と考えるが、その予想はずれ、Bが夜中のうちに出て行ったことを翌朝聞かされる。この最終場面こそが、「私」とBとの認識のズレを体現したものであり、「私」が感じる「淋しさ」とは、わかりあえないことが「解る」ことの「淋しさ」である。「芸術家」として「書齋」で生活する「私」が、「黒表中の人間」と見なされ、職業だけでなく家族までも失ってしまったBを「解る」かのように振る舞う態度、それ自体がそもそも間違っているということに気付くという形で、「私」の「解る」をめぐる物語は閉じられるのである。

おわりに——〈有島信者〉に向けられた「報告」

「私自身の読者にのみ語り得るといふ意識」のもと創刊された『泉』は、新聞雑誌という作者と読者との媒介を自ら手掛けることによって「噂さ」や「揣摩臆測」の根源を断ち、作者からの「報告」を直接的に「私自身の読者」へと伝達するための回路である。そしてそれは、『泉』掲載小説に書き込まれた事柄を「作者有島武郎」と結び付けて読むことだけに没頭する〈有島信者〉を生産する装置でもある。

その効果が最も顕著に表れる「酒狂」は、先行研究においても作者と密接に結び付けられて論じられる傾向が強かった。その癒着性を払拭するために「武郎」と「山川」という二つの固有名詞

を記号として捉え直してきたが、その作業によってむしろ浮び上ってきたのは、「酒狂」という物語が、「宣言一つ」以降の思想を有した〈有島武郎〉／社会主義運動家／山川均／その「山川」に「無政府主義者」と呼ばれるBという三本の支柱によって、それ以外の読み方を許さない構造となつているということであった。それはすなわち、作者の分身としての「武郎」が、〈有島信者〉に向けてある「報告」を発信していることを意味する。

「武郎」——「酒狂」の語り手である「私」——は、Bを語るための方法として、一人称小説の破綻という危険を冒してまでも〈卜書き〉を用いる。それはBの言葉を利用して「武郎」の内面を掘り下げ、「武郎」とBとの決定的な認識のズレを表出させるためのものである。このズレは、物語の最終場面において、「私」の「Bは寝坊するだらう」という予想とは裏腹に夜のうちに出て行ったBという形で体現される。このようにして、「私」の「解る」をめぐる物語は、わかりあえないことが「解る」というアイロニカルな方法で締め括られるのである。

「芸術家」として「書齋」で生活する「私」が、「黒表中の人間」と見なされ、職業だけでなく家族までも失ってしまったBを「解る」かのように振る舞う態度、それ自体がそもそも間違っているというこの主題は、〈卜書き〉を用いなければBを語るこゝろができない「私」の語りという方法で、終始呈示され続けているのである。

これが〈有島信者〉に直接的に伝達された作者からの「報告」であるとすれば、「酒狂」という物語は、有島にとつて「宣言一つ」をめぐる論争の真の終止符であったかもしれない。なぜなら、

「宣言一つ」をめぐる論争における最後の有島の反論「静思」を読んで倉田氏に」が掲載された第一巻第二号、第三号の次に発行されたのが、「酒狂」掲載の第二巻第一号であるからだ。

注

- (1) 『有島武郎全集』別巻(一九八八「昭和六三」年六月／筑摩書房)の「年譜」によれば、「十月一日、「泉」創刊号発行(一万一千部、十二年二月号から毎号一千部ずつ増刷、五・六月は一万五千部)」とある。
- (2) 野坂幸弘「酒狂」「骨」「独断者の会話」(『近代日本文学作家研究叢書』有島武郎研究 瀬沼茂樹・本多秋五編／一九七二「昭和四七」年一月／右文書院)。
- (3) 高山亮二「有島武郎晩年の作品「酒狂」・「骨」の成立をめぐって——そのモデルを中心として——」(『北方文芸』第一一卷九月号・通巻二二八号／一九七八「昭和五三」年九月／北方文芸刊行会)。
- (4) 内田満「酒狂」とその周辺——「私小説」への逸脱——」(『有島武郎 虚構と実像』内田満／一九九六「平成八」年五月／有精堂出版)。
- (5) 中村三春「客」「酒狂」「骨」「独断者の会話」(同著『未発選書 第一七巻 新編 言葉の意志——有島武郎と芸術史的転回』／二〇〇一「平成二三」年二月／ひつじ書房 ※初出は「客——有島武郎晩期小説論、もしくは有島武郎とアルペール・カミュ」／『有島武郎研究叢書 第三集 有島武郎の作品(下)』有島武郎研究会編／一九九五「平成七」年八月／右文書院)。
- (6) 稲垣達郎は「日本の文芸雑誌『有島武郎個人雑誌 泉』」(『文学』第二七巻第九号／一九五九「昭和三四」年九月)のなかで、『有島武郎著作集』も『泉』も「書冊の形」を一定のものに統一、あるいは単一化しているところは、この時代においても、まだ現代にもみられない、きわめて個性的な、また一種潔癖な出版形式」だと指摘している。
- (7) 「静思」を読んで倉田氏に——同時に自分の立場を明らかにするために——は「(一)提言」「(二)序文」についてが『泉』第一巻第二号(一九二二「大正一一」年一月)に、「(三)労働運動の道德的根柢に就いて」について、「(四)「積極道」について」が第一巻第三号(同年二月)というように、二度に分けて掲載された。
- (8) 本村四郎「足助素一」(『近代日本社会運動史人物大辞典』第四巻／一九九七「平成九」年一月／紀伊國屋書店)によれば「足助の叢文閣は白樺派の作家たち、知友有島武郎の作品出版に尽力するとともに、秋田雨雀、藤森成吉、山川均、堺利彦らの知遇を得て、当時盛り上りつつあった社会主義思想を中心とした出版事業を企画。採算のとりにくい左翼出版物を次々と出版した」とあり、「酒狂」掲載の第二巻第一号にも山川均著作の広告文が掲載されている。なお、登場人物「O」については特定できなかった。
- (9) 「泉」終刊号「故人の死を悼みて足助氏に宛てたる書(七月十八日迄に着の分)」の山川均の便りには「略」僕は有島氏を知らぬ、ほんの一度か二度、著作家協会で遠方から顔を見た。けで言葉を交わしたこともない。／有島氏の考へについても勿論深くは知らぬ。然し自分と違うた考へ方に忠実な有島氏に対しては、自分と同じ考へ方をする人々のうちの或るもの以上の敬意を表せざるを得ぬ」とある。

(6) 稲垣達郎は「日本の文芸雑誌『有島武郎個人雑誌 泉』」(『文

(い)しいかな 大学院博士前期課程在學生)